「食と農の教育」座談会

「食欲の秋」
現代の子どもたちが、食の面において今、どのような状況に置かれているのか…。
昨年度、地場産米学校給食を導入した南国市の「食と農の教育」の現状について、竹内直人南国市地域教育指導主事の司会のもと、6人のパネリストが語り合いました。

西森 善郎
南国市教育長

松崎 淳子
高知女子大学
名誉教授

吉澤 文治郎
ひまわり乳業
専務

司会 まず、現代の食文化といいますか、食を取りまく状況について、考えをお話しください。

川村 現在は、非常に簡単に食べ物が手に入る、お金さえあれば、あらゆる所に食べ物が溢れている状況ではないかと思います。

池上 うちの生徒を見ていましても、やはりお金を出しながら食べ残し、粗末な扱いをしているということが一番気になりますね。ただ、作る苦労・喜びというものを日ごろの学習で経験しているので、心の片隅には、少しは「いただく」という気持ちはあるんじゃないかなと見ています。

吉澤 今、食品の安全性とかいろいろ出てますけど、健康によいとか、自然でよいとかいう情報があまりにも多すぎて、判断に迷っている状況ではないでしょうか。

入交 昔、我々は常にお腹が空いていたという記憶が鮮烈にありますけれども、今の子どもたちは、まったく食に対する魅力といいますか、実感がないんだろうと思います。また、加工食品がほとんどですから、家庭の味というのもなくなり、食に対しての思いが貧困になったんじゃないですかね。

松崎 そういえば、昭和33年にチキンラーメンというインスタントが出たのを皮切りに、加工食品が出てきました。初めは「すごい、すごい」と大騒ぎだったのが、さあ40年代、50年代にかかってきたら、「おかしい」「家族の様子がおかしい」ということになってきたんです。

司会 それでは、このような食状況のなか、学校給食はどうあるべきでしょうか。

西森 私は、基本的に戦後の学校給食の役割はもう終ったと思います。これから先は、さまざまな、例えば体験学習も含めて、新たな時代の要請に応える付加価値を持った学校給食を作っていかなければいけないんじゃないかと思っています。

松崎 私も戦後っていうのは、せめて子どもにだけは十分な栄養をというのが発想の元で、そこにアメリカ産の脱脂粉乳と小麦粉の都合が一致したと思います。

池上 私は学校給食を考える時、やはり食物の安全性を大事に考えます。

吉澤 今、おっしゃった安全性の問題というのは、食品開発の面でもいえますが、自然な物を、本当に安全に作られた物をお届けするというのが大切なんです。

司会 地域の生産者側からみれば、いかがでしょう。

川村 作物は、種を蒔いても

川村 一成
こうち元気者
交流会 幹事

池上 一郎
高知農業高校
校長

入交 啓
南国市農林課長

食教育の必要性

持ってると思います。学校給食で一番大事な安全性の問題には、こだわり続けなければいけませんが、一方でこれは食事ですから、おいしいものをどう提供していくかということと調和させていかなければなりません。

司会 2002年度からの新しい学習指導要領における総合学習で、命や自然の大切さというものを学ぶということが大きく取り上げられようとしているわけですが、今改めて農業教育の大切さといいますか、食教育の必要性についてご意見をお願いします。

入交 農業をやるというのは、ものすごいコマンがいるんですよね。夢がないといかん。今苦しいことがあったとしても、その中に楽しみを見出していくという、とにかく手っとり早くお金にしようということとは無縁の世界ですから。しかし、一方では農業を忘したいという青年がいることも事実なんです。

池上 後継者についてですけど、実践農業大学校の約半数の人たちが卒業後、農業に従事するわけなんですが、その数字と本校の数字とを足し合わせますと、1年間に20人くらいの若い後継者が育ってるわけなんです。少ない例かも知れないんですけれども、やっぱり農業に夢を持ってやる子どもたちもいるんです。

司会 では今後、学校・地域・家庭が連携して「食農教育」を発展させるためには、どうすればいいでしょうか。

入交 飽食の時代だけれども、子どもたちに飢餓体験をさせて、一体腹が減るとはどういうことなのかを分からせたい。

川村 イベント的なものじゃない、もうちょっと長い体験学習というのを、やっていけたらいいですね。

吉澤 私どもの会社でも、南国市の産品で協力できるような具体的な物があれば、どんどんやっていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

松崎 こういった場を発信基地にして共通の思いを広げていかないと、やっぱり地域へに広がっていかないと思います。

地域とともに築く学校給食をめざして

司会 教育長、最後に一言お願いします。

西森 何といっても、地元とともに築く学校給食。

それは、生産者の姿が双方向に見えるということだと思うんです。作る方も子どもたちが飲んでくれる、食べてくれるからこそ、いくらでも安全性を考えてくれる。子どもの方からいえば、あそこの工場で私たちのために、おぼんいっぱいに作ってくれているんだというその双方向の相互信頼だと思います。

また、これから先の「食農教育」を進めていくのに、子どもへのアプローチだけじゃなくて、親子同時にアプローチしていくことも一層大切にしていかなくてはならないと、皆さんの意見の中から学ばさせていただきました。

本日はありがとうございました。

（内容は、あらましです）